

「ことばの教育」としての英語教育 —1930年代における成城小学校の英語教育に学ぶ—

谷 脇 由季子

はじめに

本稿は、いわゆる「昭和八年成城事件」（以下「成城事件」）の終結以後、1940（昭和15）年までの間、成城小学校で行われていた英語教育について明らかにすることを目的としている。

筆者は、拙稿「日本における初等英語教育の源流」（2021年）において、牛込時代の成城小学校における英語教育について、子どもたちが英語を流ちょうに話せるようになることではなく、まだ先入観のない子ども時代に外国人とコミュニケーションをとることを目的としたものであったこと、その手段として、動作遊戯と呼ばれた歌やリズムなど、子どもにとって楽しく自然に英語が口をついて出るような方法をとっていたことを紹介した。しかし創設者である澤柳政太郎の死後は、担当していたミス・ブリッジスも成城を去り、牛込時代に築き上げた英語教育が継続されることはなかったことを明らかにした。

そこで本稿では、砧に移転してからの英語教育について、特に1930年代後半に成城小学校における英語を担当していた深水正策の報告を中心として、その概要を紹介する。とくにこの時期は国民学校令公布に向けてカリキュラム改革が行われていた時期であり、その中で英語科は、「ことばの教育」として行われていた。それは柳田国男による子どもの言葉に注目した研究に影響を受けており、それをさかのぼると、澤柳たちによって行われた成城小学校における最初の研究である「児童語彙の研究」に行きつくのである。さらに、深水は「ことばの収集」を中心とした英語教育を媒介として、学校段階をまたいだ「縦の連絡」、教科をまたいだ「横の連絡」を目指していた。

こうしたことから、「ことばの教育」としての英語教育を軸に、成城ならではの

の教育の方法の可能性を探ることができるのではないかということを提言的に述べていくこととする。

1. 砧移転以後の成城小学校における英語教育

(1) 『成城小学校』（1929（昭和4）年）で目指した英語教育

1929（昭和4）年に発行された成城小学校を紹介する小冊子『成城小学校』には、小学校の正課として英語科が設定されていることがはっきりと述べられている。その目的は、「児童がその単純なる模倣性に富めるところより、最も自然に興味をもつて、幼少の頃より英語の雰囲気十分に十分ひたらせ、しらずへの中に簡単なる言葉に綴られたる音に親しませ、それを彼等自身発音することに依り、口びる、舌、咽喉等を自由に滑らかに動す練習をなさしめ、教師の正しき発音を耳にして、直に言い返へさしめて英語をたやすく口にする習慣をつける事。絵、物品、動作、歌、遊戯等を通じて、英語で考へるところまで進歩させたい」という、半込時代とはかなりその色合いを異にしたものであった⁽¹⁾。

その方法は、外国で出版された初等英語教科書を採用し、その他に掛図、単語カードなどを用いるというもので、「小学校に於ける英語は、読み書きよりも、耳を通し、目を通して、大人にても会得しえざる空気になれさせることにある」と明言する。つまり、ミス・ブリッジスたちが行っていたような、子どもたちに英語に親しませようというものではなく、完全に「英語で考えられる」こと、もっと言えば、子どもをバイリンガルとして教育することを目指していたようにも思われるのである。

もっとも、澤柳の死後、実質的に学園を運営していた小原國芳自身が「英語で考へる」ことができるほどの英語教育を目指していたかという点についてはかなり怪しい。このことについて、当時成城小学校訓導であった柴田勝は、次のように証言している。

昭和10年、学園本部の事務員で、小原先生の秘書であった石井弥吉氏は、ある時私に語った。「私立学校に英語がある、というのは入学志望者に影響

があるそうだけ」と。つまり、英語がある、ということによって、志望者が多くなる、というのである。⁽²⁾

証言の真偽はともかく、少なくとも成城小学校における英語は決して「正課」などではなく、むしろ受験生を集めるための一種の経営戦略の側面もあったのではないかと推察できる。一方で、中学部以上の教員たちにとっては、異質の存在であったようである。それは、柴田の次の証言でも明らかである。

私が成城学園にきた頃の成城小学校では、英語教育に熱心であったとは見受けられなかった。しかも、中学、高校、女学校の英語教師たちは、小学校の英語教育に対して、かなり批判的であったように思う⁽³⁾

では、そのような状況下での英語教育とはいかなるものであったのだろうか。次にその点について見てみることにする。

(2) 砧時代の英語教育担当者たち

ここでは、砧移転後、終戦までの英語教育担当者たちについて紹介する。なお、彼らについての史料はほとんど残されていないため、野上三枝子「成城学園初等学校における英語教育の歴史」(成城学園教育研究所『成城学園教育研究所研究年報』第1集、1978(昭和53)年)に紹介、掲載されている小宮巴や柴田勝の文章も参照している。

① 広岡八重子・佐恵子姉妹(ひろおか・やえこ、さえこ、1928(昭和3)年5月～1929(昭和4)年9月)

学園生徒の保護者であり理事でもあった広岡恵三の次女と三女である。彼女たちの弟で広岡恵三の唯一の男子であった広岡喜一は、成城高等学校の第一回松組の卒業である。

② 鍋島てる子(なべしま・てるこ、1931(昭和6)年1月～1934(昭和9)年3月)

柴田勝は、彼女のことを「日本女子大学出身の独身の女性」で「斉田喬氏の教

え子か知り合いの人」であつたらしいと紹介している。また、鍋島の英語指導に不満を持った保護者が「津田英学塾出身の年配の女性」を伴って授業を参観し、授業後に「父兄達の前で、鍋島さんに英語教育についての考えや実施方法について説明させた」ということもあつたらしい⁽⁴⁾。当時成城小学校の児童であつた野上によると、鍋島は実際に『成城小学校』で示されたテキスト類を使って子どもたちに教えていたようである⁽⁵⁾。ちなみに、この時期の英語は必須でないものの、「父兄たちの申し合わせで、クラス全員が英語教育を受けさせる」ということになつたらしい。

③松本尚家（まつもと・なおいえ、1933（昭和8）年9月～1934（昭和9）年3月）

④木村（きむら、1934（昭和9）年？～1935（昭和10）年？）

彼らについては、紹介している野上自身よく知らなかつたようである。松本については、『成城学園時報』第46号（1933（昭和8）年9月30日）の「小学校だより」欄に「新任の先生」として名前が挙がっている。成城小学校着任の前後については不明であるが、戦後は小学校教育に関する著作を出版しており、1951（昭和26）年に教育学担当教授として東京外国語大学に着任している。木村についてはまったく不明である⁽⁶⁾。

⑤深水正策（ふかみず・しょうさく、1935（昭和10）年9月～1940（昭和15）年12月）

深水は英語教育の専門家ではなく、上智大学を中退した後コロンビア大学とハーバード大学でエッチングを学んでいた。数年間を欧米ですごしたのちに帰国し、1935（昭和10）年9月に成城小学校で子どもたちに英語を教えることとなった。その経緯について柴田は、「ニューヨークで英語を勉強し、英語ができるということで、英語の教師として採用されたのではないかと思う」と述べている⁽⁷⁾。その後、1940（昭和15）年12月に大政翼賛会生活指導部に入り、成城を離れることとなった⁽⁸⁾。

彼は、戦後は画家・版画家として活躍したが、終戦直後から1950年代前半までは成城の初等教育にかかわっており、終戦直後の数年間成城学園で発行していた『教育改造』には何編か論文が残されている⁽⁹⁾。

番外①：1925（大正14）年、砦に移転した成城第二中学校と併設された成城玉

川小学校との兼任職員として、広岡姉妹の姉である広岡多恵子が低学年英語を担当していた⁽¹⁰⁾。また、この時同じく小中兼任の英語担当として、塩月よね（米子）、北島修一郎も名を連ねていた。

番外②：1936（昭和11）年に成城小学校から発行された『成城』（後述）の第1号には、「英語担当」として深水正策の名があるが、第2号の巻末、「第1号増補、正誤表」に、英語担当者として深瀬嘉三の名が記載されている。深瀬は、当時成城高等学校中学部において英語を担当していた。このことから、小学校では深水を中心とするものの深瀬も英語教育に携わっていたことがわかる。

野上は、上記の教員のうち、広岡姉妹、鍋島、松本にそれぞれ学んでおり、「確か、選択科で週2時間、イギリス製の立派な本を使った記憶はある」⁽¹¹⁾と回想している。別の論文では、低学年で教わった広岡姉妹については「毛皮の襟のコートを着たハイカラな婦人」との印象が強かったらしく、その彼女たちに「塗り絵や、フェルトを張った果物の絵（今のマグネットのようにフェルト地の板に張り付く）で習った覚えがある」と紹介している。こうした方法は、現在でも幼児を対象とした英語教育で採用されている。

その後、小学校卒業まで学んだ鍋島や松本については、印象に強く残った部分を除き、内容はほとんど記憶に残ってはいないらしい。特に松本については、「成城事件」直後から年度末までの半年間という短い期間の在籍であり、同時に彼女にとって卒業までの半年であったためであろうと思われる⁽¹²⁾。だが、少なくとも鍋島や松本の行った英語教育については、「外国製の教科書を用いたが、Miss Bridges ほど英語ばかりの direct method ではなく日本語で説明して下さった」と述べているところから、半込時代の英語教育とも、1929（昭和4）年の『成城小学校』で大々的に発表したものとも大きく異なっていることだけは確からしい⁽¹³⁾。

2. 「成城事件」以後の成城小学校の様子

(1) 千種円爾小学部主事の就任

成城小学校では、「成城事件」によってほとんどの訓導が1933（昭和8）年夏には退職してしまった。そのため、新しく小学部主事に千種円爾（1933（昭和8）年9月就任）を迎え、柴田勝をはじめ数少ない残留教員に加えて、新しく就任した訓導が子どもたちの指導に当たることとなった⁽¹⁴⁾。

千種は就任してすぐに、「自学」のみならず成城小学校における指導体制そのものが危機的状況にあることに気づき、その是正を当面の第一の目標とした。彼が観察した当時の小学校の様子は、以下の文章にみることができる。

児童の数名は投球。他は雑談中。私が何の時間と問へば、国語の自学と口々に答へる。国語の自学を意識してゐる。で、投球も雑談もいけないと分かつてゐるので狼狽しながら止す。ある者は本を出す。国語の本だ。ノートをだす。鉛筆も用意するのもある。之等が必要であることは知つてゐる。然るに本は徒らに開いたり閉ぢたり落着きがない。若し何課をみようと思つてゐるならもつと確実に頁を繙す筈〔。〕ノートも鉛筆も弄ぶ丈。これが自学！児童達はさて国語の本でどんな性質のどんな程度の仕事をしてよいか分らないのだ、全く指導のない先生のない自学であつたのだ〔。〕自学用学習書も如何に努力用意しても教科書と同じ死物。私共は自学の基本として、どんな性質のどんな程度の仕事をするかといふ事について児童を指導し直して、仕事を児童の身につけてやらねばならない。その後で自学を生かさう。⁽¹⁵⁾

これは国語の様子であるが、このあと数学の場合、労作の場合、職員室での様子といった各場面について観察の結果を述べていく。千種は、こうした非常に放縦な児童の様子を描写してはいるが、もちろんそれは観察の結果であり、それまで小原のもとで子どもたちに接していた訓導たちの指導を非難しているわけではない。また、直前に「成城事件」の混乱を目の当たりにして、信頼する教員たちが悉く自分たちの前からいなくなってしまったのに、子どもたちが冷静でいられ

るわけではあるまい。千種はそれを万事承知の上で、新しい教員集団によって従来とは異なる方法で「学園精神を成就する」と抱負を述べる。

基本陶冶と基本指導を失ふてはならない。各児童に基礎指導を与へて真の自学が出来る処に導入する、教員は児童自らやつてゐるかのやうな感を与へる程に上手に指導してゆく、特別科目とか各児童の特別な仕事に自学を学園式に入れてみたい。⁽¹⁶⁾

このように、成城小学校では、「成城事件」で大きく揺らいだ教育や研究に対する信頼を取り戻すため、千種主事や柴田たちを中心として、様々な課題に取り組んだ。ただ、この時期の英語教育に関する記録は、学園内に残されていない。唯一の例外は、前述した松本や木村といった講師を迎えて、希望者に対して英語教育が行われていたという証言だけである。

(2) 『成城だより』と『成城』の創刊

ところで、「成城事件」の混乱から少しずつ落ち着きを取り戻しつつあった1934（昭和9）年7月には、銅直勇校長により小学校における研究や学校における子どもたちの様子を伝えるメディアとして『成城の教育』が創刊された⁽¹⁷⁾。

さらに1936（昭和11）年度は、成城小学校にとって画期となった。1935（昭和10）年3月に千種が成城を去って以来、高等女学校主事であった上里朝秀が彼の後を引き継いで小学校主事となっていたが、この年、中学部の主事であった小宮巴が小学校主事に就任し、銅直校長のもと、小宮と柴田勝が中心となって小学校におけるカリキュラム研究を中心とした研究と教育が行われたのである。

その年の10月、学園の全家庭に向けて小冊子『成城だより』が発刊された。これは、高等学校で発行されていた『成城学園時報』とは別に、教職員からの発信による「全学園のニュースを発刊すること」を目指して創刊されたものである⁽¹⁸⁾。

また、小学校では独自に小冊子『成城』を各家庭に配布した。これは、副題にある通り「学校と家庭との連絡のため」のものであるとしているが、要は、成城

小学校の教育方針や各教科の様子、夏の学校などの行事を知らせるためのものである。「学校から家庭へ」と題した第1号巻頭言には、「幸ひにこの企が御家庭との連絡を一層密にし、学校を正しく識つていたゞき特に新しい方々には早く学校を理解して下さる契機ともなりまして、学校全体に対して一層の御協力とご援助を賜はりますれば誠に幸にぞんじます」と、これまで以上の学校への理解を求めている⁽¹⁹⁾。このように、この時期には、学園の復活を内外に示すために、様々な発信が積極的に行われたのである。

とくに、小学校で発行された『成城』では、成城小学校の教育に関して、第1号と第2号の2回にわたり、「教育の根本問題について」と題した小論を掲載している。ここでは、『現代教育の警鐘』（1927年）などに掲載されている澤柳の言葉を随所に引用しながら、成城小学校が「一定の教育主義、教育理想を標榜して生まれたもの」でなく、あくまでも「全くの教育の研究、教育の実験にある」ことを強調している。そして創設以来19年の間に、「新教育の本山」、「自由教育の発祥地」、「教育の理想国」、「自由主義教育」、「ブルヂョア教育」などといった様々な世間からの評判や批判があったことを認めつつも、「其の間の研究には実に貴重なものがたくさんあるのであつて過去及今日の教育界の均しく認めるところ」であると自負する⁽²⁰⁾。

この小論は、同時に、この時期における新たな研究実験学校としての成城小学校の出発を高らかに宣言するものでもあった。

第3号になると、それはより具体的な形で表明されている。

我成城小学校は独自の教育観、独自の教育方法を持つて居る積りであります。そして独自の教材を持つて居ります。教育一般、並びに教科組織、各教科の教育方法、教材は独特の物を持つて居ります。これらについて漸次父兄各位に御通知いたしまして、相共に研究考察していきたいと思つて居ります。⁽²¹⁾

実際、第3号から第9号まで、成城小学校における教科の研究について特集が組まれている。それは以下の通りとなっている。

第3号 (1936 (昭和11) 年12月)	「成城小学校の数学教育」(数学部)
第4号 (1937 (昭和12) 年6月)	「成城小学校の国語教育」(国語部)
第5号 (1938 (昭和13) 年7月)	「低学年の理科教育」(理科部)
第6号 (1938 (昭和13) 年カ)	「高学年の理科教育」(理科部)
第9号 (1940 (昭和15) 年7月)	「成城小学校地理教育」(地理部) ⁽²²⁾

この時期の日本は、中国をはじめ各地で展開していた戦争のさなかにあった。そのなかで、全国の小学校は1941(昭和16)年の国民学校令公布によって「国民学校」となったが、私立小学校は廃止の危機にさらされた。結果的には既存の私立小学校は存続したものの(第52条)、学校名称だけでなくその教育の中身にまで踏み込んださまざまな変更を余儀なくされた。

国民学校令公布を前に、文部省は数度にわたって講演会を開催し、移行に向けて準備していたが、それに合わせて、成城小学校においてもカリキュラム研究とその改革を進めていた。その内容は、創設以来培ってきた教育研究の伝統を守るため、その独自性より国民学校の目指す教育との親和性を強調するものであった⁽²³⁾。上に挙げた教育研究特集も、そうした動きの一環とみることができる。

こうした時代にあえて行う英語教育とは、どのようなものであったのか。次章では、いよいよ戦時下における「英語科」について、担当者であった深水正策を中心として検討する。

3. 深水正策の英語教育

(1) 「随意科」英語

先に紹介した『成城』第2号には、英語科の学習の内容が紹介されている。ここでは、この紹介記事を中心として、当時の小学校における英語教育についてみてみよう。

深水は、冒頭で「この科では、言葉を蝶々や花にみたててお伽の花園で遊ぶ心持で、のんびりとことばの採集を致します」と述べている。つまり、テキストなどを使って英語を教えるということは、ここでは行わないことを宣言している。

そして、英語教育の目的を「六ヶしく申せば柳田国男先生の日本民俗学の基礎を語学教授に利用して、実地見学を主として言語の採集、分類、実験をします。そうして言語に対する豊かな理解と深い素養を作るのが目的です」と述べ、英語を学ぶのではなく、英語を含めてことばの教育をしようというのである。それどころか、小学校の英語教育は「単なる語学技術を呑みこませることが目的では」なく、「徳育を根本とした総合教育〔、〕広い意味のことばの教育」であると断言するのである⁽²⁴⁾。

具体的には「採集、分類、実験」の三種類の方法をとるが、それは子どもたちがいちいち表明されず、教員側の意識の中でのみの分類である。したがって、深水は子どもたちに対しては、「臨機応変に、小型写真機、幻燈、トーキー、蓄音機、版画、劇、人形芝居、音楽を利用」して、言葉の世界にいざない、一見するとそれは英語とは全く関係のない教育となった⁽²⁵⁾。

のちに、柴田は深水の英語教育について、次のように述べている。

深水君の時代は『英語』は殆ど実際にはやっていなかったように私は思う。『お話』を語って聞かせたり、『工作』をやらせたり、『外来語』を扱ったり、高学年では『人形芝居の舞台』等を作らせたりしていた。そして彼の後期には映画、幻燈、写真つまり視聴覚教育を実験し、熱心に行っていた。⁽²⁶⁾

既に述べたように、深水が成城小学校で本格的に英語科を担当していた時期は、国民学校令に対応するためにカリキュラム改革を行っていた時期である。随意科とはいえ、小学校で堂々と英語を学習するという雰囲気でもなかったであろう。実際、深水が成城小学校で英語を教えていた5年弱の後半は、読み聞かせなどを主に行っていたようである。当時の児童の思い出にも出てくるのは、メルヴィルの『白鯨』の読み聞かせで、後に深水自身「私の一番得意な」ことであったと回想している⁽²⁷⁾。

しかし深水は、英語教育を学校教育におけるカリキュラムから外れた異質なものとせず、随意科とはいえ、カリキュラム上に位置づけようとしていた。それが小学校英語の連携である。次に教科の連携の点から、当時の成城小学校における

英語教育についてみることにする。

(2) 教科の連携—「ことばの教育」としての英語教育

①中等教育との連携—縦の連携

深水政策は、英語教育において「縦の連絡」を目指していた。このことは、「英語科の教育」の次の報告から分かる。

英語は随意科としてのみの存在でありますので特に縦には学園全体としての、尋常科、高等科、女学部との連絡を取り、各児童の天分に応じて伸びられるものは自由に育て、語学に関する合同の研究、発表を致します。⁽²⁸⁾

また、学園全体の連絡会議で小学部に対して「英習字の注文」があったことに対して、1936（昭和11）年の2学期から始めると述べている。

ただ実際には、小宮巴が「中・高は七年制で職員室も同居で職員会議も一緒だったから自然連絡も密接だったが距離的にも離れていた小学校が一番疎遠でした」⁽²⁹⁾と述べているように、教学面でも会計面においても第二中学校やその後の七年制高等学校との関係は希薄だった。高等女学校とは、兼担する教員もいたことから、高等学校ほど疎遠ではなかったが、「成城事件」で高等学校と高等女学校の教員たちがほぼ同一歩調で行動していたのに対し、小学校の教員たちは結果的にほとんどが退職してしまったことから明らかのように、独自路線を歩んでいたようである。

英語教育についても実際の授業レベルでの連携はまったくと言っていいほどなかった⁽³⁰⁾。それどころか、小学校で行っていた独自の英語教育が中学部ではほとんど意味をなしていないという不満が、起こっていたようである。小宮は続けている。

そのころ、中学側では小学校の英語の授業に種々の疑問を抱いて居りました。中学校の英語は他の小学校から入学してきた、ABCも知らない生徒を対象に一斉授業をするため、成城から進学した生徒にとっては、極めて楽

で、手持無沙汰でのんびりやっている中に一学期はまだしも二学期、三学期と進むにつれ成績の上では差がなくなり、却って逆転するケースも出てくる有様でした。折角成城小学校で英語をやっても、中学の英語教育のやり方や採点の方法では、その効果は表れてこないという疑問や意見が多かったのです。⁽³¹⁾

ここで分かるように、小学校ですでにある程度の英語を理解した状態で中学部に進学したとしても、中学部では成城小学校以外の出身者が多いため、実質的に英語の初学者たちを対象とすることになる。その場合、成城小学校出身の生徒は、最初のころは理解にまったく問題ないために、かえって中学生としての学習習慣がつかないまま進級し、学年が上がると、思ったほど成績が振るわないという困った事態に陥る場合が少なくないわけである。したがって、小学校での英語教育がかえって中学部では足かせになると考えられていた。

成城高等学校の中学部では、英語学習の方法は、ほかの学校と変わらないものであったようである。『成城だより』には、「英語学習上の根本態度として、英語とは単に紙の上に書かれた文字のことではなく、生きてゐる一個の人間が他にむかつて自分の考へてゐる意味を音声を通して伝へたものであると云ふ考へを強調したい。(中略) そうした基礎の上に立たなければ、英語の正しい理解や発表は断じて不可能なのです」との英語担当教員であった深瀬嘉三の文章が掲載されている⁽³²⁾。深瀬は、英語学習において最も重要なことは「発音を通して直接に意味を解すること」と考え、特に初学者である中学校の1、2年生のうちは、家庭学習では予習よりも復習を重視する。「この時期は、基本的な英文の型をいろいろな方法によつて反復練習をせしめて、よき言語習慣を作ることが、その目的でありますから、生徒は単に意味が解ると云ふ程度に満足せず、発音・暗唱・書取・文法練習など、ほとんど機械的になるまでに、自ら繰返へし、繰返へし、やつて見ることが、シツカリした英語の基礎を作る上に最も肝要なこと」というのである⁽³³⁾。

これは、現在でも行われている、ごく標準的な中等教育機関における英語教育の基本である。つまりこれは、明らかに当時の成城小学校における英語教育とは

まったく異なったものであり、小学校と中等教育機関との縦の連携は、実際にはなかったことが分かる⁽³⁴⁾。

②他教科との連携—横の連携

深水はまた、「徳育を根本とした総合教育」、「広い意味のことばの教育」を目指し、「ことば」を通して英語と他の教科との連携を意図していた。それは、彼の次の文章にも表れている。

現代の児童は都会におけるあらゆる交通機関に対し大人も及ばないくらいにたくさんの言葉を知つてをります。次にはスポーツ用語、それから洋菓子、洋食、お伽話などで外来語即ち日本語になつた外語及び英語を知つて居りますことは驚くほどであります。私共は、これらのことばを利用して歴史、地理、理科の諸学科と連絡を取りながら勉強するのです。⁽³⁵⁾

先に触れた「採集、分類、実験」という言葉の「勉強」は、横の連携としての他教科との連携で発揮される。実際には、日常生活とは別に教室の外に出て（深水はそれを「見学」と呼ぶ）、そこでさまざまな言葉を採集する。そして「採集した言葉を他の諸学科へ分類しことばの歴史性やその移動、変化を日本の方言などと比較し、その実験に、劇、音楽、人形芝居を扱」う。そのため、言葉を通じて「いつでも他の諸学科を違つた角度から重複して研究させる」ことになる。もちろん勝手に行うのではなく、「見学には前もつて他の学科の主任と連絡をとつて行動」するという周到ぶりである⁽³⁶⁾。

こちらは、小学校のみで完結するため、比較的有効であつたのではないかと推測するが、戦時下ということもあり、実際には継続的な研究に発展することはなかったようである。

4. 学習の基礎としての「ことば」 — 「児童語彙の研究」と英語教育

(1) 『児童語彙の研究』が示唆するもの

1917（大正6）年の創立当時から、成城小学校における一貫した研究対象は子どもそのものであり、子どもの使う言葉であった。最初の研究の動機は、成城小学校における最初期の訓導であり、澤柳や長田新と共に『児童語彙の研究』（1919年）を完成させた田中末広が述べたように、「一体小学校に入学する子供はどのくらい言葉を知っているのだろうか。そして入学してから、言葉をどれだけ教えたらいいか」⁽³⁷⁾ というものであり、「入学前の子どもの語彙力をしっかり知ることによって、国語教育においてどのレベルのものをどのような方法で教授するかという基準を作るための最も基礎的な研究」⁽³⁸⁾ であった。

この研究は、澤柳自身がのちに興奮して関係者たちに報告したように、就学前の子どもが3000～5000語もの言葉を知っているという事実を示すこととなった。これは、後に様々な学校においてさらなる調査・実験が行われている⁽³⁹⁾。このように、子どもの言葉についての調査・研究は、成城小学校における代表的な研究であっただけでなく、さまざまな方面への広がり期待されるものであったはずであるが、残念なことに、成城小学校において研究が進展することはなかった。

しかし、子どもたちは言葉を通じて学び、知識を習得していくことを考えれば、言葉を媒介にして、国語のみならず他のあらゆる教科学習における学習への応用が期待できる。この研究があつたればこそ、低学年における読み聞かせから始まる聴方教授や読方教授と結びついた修身教授の4年生開始、あるいは算数（後に児童数学となる）の2年生開始など、いわゆる教科の開始時期の研究につながる提言が可能となったともいえる。その意味で、『児童語彙の研究』は、初等教育の根幹に関わるものであり、その示唆するところはあまりにも大きい。それを踏まえて昭和10年代の英語教育が「ことばの採集」を基にしたものと想定されたことは、無自覚ながら、『児童語彙の研究』の系譜を継ぐべき研究・実践となる可能性を十分に持ったものであったと言えるのである。

(2) 柳田国男の「児童語彙」研究の影響

この時期の深水の実践に関してもう一つ重要なことは、彼が子どもの言葉に関する研究において、柳田民俗学と成城小学校の教育を、英語教育を媒介にして結び付ける実践を行っていたということである。深水は次のように述べている。

私を、砧成城へ結びつけた沢柳政太郎先生と同じ村に移住された柳田国男先生の、立場はそれぞれ異なってはいますが、ほとんど相前後して発表された児童語い、この二種類の児童語いの研究をもとにして、あるいは、それに勇気づけられて、私は英語教育という楽しい夢と希望を描いたのであります。⁽⁴⁰⁾

先に指摘しておいたように、深水は柳田の民俗学を英語教育、言葉の教育に応用していた。

成城小学校の元教員であった庄司和晃は、『柳田国男と教育』（1978年）の中で、柳田における言葉の教育について次のように述べる。

『分類児童語彙（上巻）』の持つ意味はなかなか大きい。一つには柳田における「子ども」面の取り扱い上の変質ないしは発展があり、二つにはこの書が児童語彙の研究史上で画期的なものだからである。⁽⁴¹⁾

柳田は、1933（昭和8）年の『小さき者の声』（1933（昭和8）年に出版されたのち、1942（昭和17）年の文庫化を機に改版）をはじめとして、子どもの言葉に注目した研究を行い、1949（昭和24）年に発表された『分類児童語彙』において結実する。

庄司によると、柳田の主張する「児童語彙」は、澤柳たちの用いたそれとは異なり、「児童に限られた特殊の物言ひ」⁽⁴²⁾のことであり、単にその年齢の子どもが聞きかじったりして知っている言葉ということではない。そしてその研究は、「児童にのみ関係した語彙の研究であるがために、必然的に児童の世界そのものを究明したことになった」⁽⁴³⁾。

上述したように、深水は柳田に大きな影響を受けており、「児童は明日の希望

を意味し、昨日の伝統を保持し、そのふたつのことばの遊びのなかに成長しているのです。私の英語教育は、このなかへ仲間入りしようと試みたものです」⁽⁴⁴⁾と回想している。

それがどのように現実の英語教育に応用しようとしていたのかは不明であるが、深水の試みとしては、子どもたちが日常生活で知っている英語の言葉を、子どもたち自身に採集させるという、いわば澤柳と柳田の二種類の「児童語彙」研究の融合を考えていたと考えられる。いずれにせよ、少なくとも試みとしては非常に興味深いものである。

周知のとおり、柳田民俗学は戦後の成城初等学校における独自の社会科教育の元となったが、昭和10年代にはすでに、英語教育において言葉の教育として大きな影響を与えていたということは、柳田民俗学と成城教育との関係性を見る上でも、非常に興味深い。

(3) 野上三枝子の初等英語教育研究

1950（昭和25）年から成城学園初等学校の英語を担当していた野上三枝子は、次のように当時のことを述懐している。

とにかく、日々の授業の中で、何が子供たちにとって大事で、彼らは何にくいついてくるか、その反応を見極めながら、試行錯誤の積み重ねのうちに、教材を作り上げていった。（中略）しかし、当初からの、児童と英語……、児童と言葉、児童と外国語……との関係、という根本的な問題を、どこからどう研究していいのかという命題は、漠然としたままに、過ぎてしまった。⁽⁴⁵⁾

野上は、1978（昭和53）年8月に行われた幼児言語学第1回世界大会（The First International Congress for the Study of Child Language）において、児童の外来語の語彙調査について発表した。それは、彼女自身が初めて子どもたちに英語を教える導入の際、「英語は身近なものであるという認識を深めるために外来語を利用してきた」という経験から始まった調査であり、その内容は次のとおりであ

る。

私が授業に外来語を利用する場合には、あくまでもこちらが与えるもので、彼らはどんな外来語を知っているのか。多くの子供たちが共通して知っている外来語は何か。どういう分野のものか。それを調査し、分析することによって、児童に密着した教材の基礎になりうるのではないかと期待した。⁽⁴⁶⁾

その後現在に至るまで、初等学校ではさまざまな英語教育実践を行っている。とくに、野上は音声教育に力を入れており、1978(昭和53)年に英語教室(Language Laboratory, L.L.)が新設されてからは、ますます小学校英語の充実が期待された。しかし、それが中学校と連携することはなく、一貫した英語教育となったとは言えない状況が続いている。

おわりに—英語教育の新たな可能性として

野上は、『成城教育』の英語教育特集で、初等英語教育と中等英語教育との連絡について、次のように述べている。

中学校の先生方に『成城の初等学校から来た者は概してカンがいいが、それに頼りすぎるきらいがある。』との御批評をうけました。前述の私共の授業内容を御覧になっても、その欠陥に気づかれることと思います。しかしまた別の考え方をすると英語のカンをみがくには、初等学校が最もよい時期であり、そのカンを中学校で理論的に裏づけして頂ければ、高等学校に進む頃にはぐっと実力がつくはずではないでしょうか。そのはずがはずどおりにゆかない場合は、私達のカンのみがき方が足りないのと同時に、中学校での学習にも不徹底なところがあるからだと思います。こう考えると、初等教育の責任は重大です。下からずっと成城教育を受けて来た大学の学生の英語の力を、いろいろの角度からしらべてみると、個人差は大きいでしょうが、それでも、成城の英語教育の特徴、缺点がいくらかわかるのではないのでしょうか。⁽⁴⁷⁾

この論文が発表されてから60年以上経っているが、その当時の状況も戦前のそれと何ら変わっていないことが分かる。では、現状はどうであろうか。もちろん、現在の英語教育は、当時とは異なっているであろうし、もっと進んだ英語教育が行われているであろう。それに、そうした現在進行中の教育研究についての言及は、本稿の目的とするところではない。

ただ、日本の学校教育において従来以上に英語教育が重視され、小学校5年生から英語教育が必修となり、3年生からの外国語活動を含めて、英語教育における初等段階と中等段階との連携が急務となっている。実際には、従来中学校で行われていた英語教育が一部小学校に前倒しされ、必ずしも発達段階に応じた学習となっているわけではない。もちろん、すでに初等英語教育についての研究は行われているものの、初等英語教育を担当する教員の資格、教員や授業時間の確保、初等英語教育法の確立などといった実施についての検討も未だ途上である。そのようななか、見切り発車的に導入したことによって、むしろいわゆる「英語嫌い」の助長や、早期の英語学習経験の有無による格差などの弊害を引き起こしかねないという懸念もある。

そのような状況で、成城学園は一日の長があることは確かであり、成城学園のような形態の学校ならではの研究メリットがある。つまり、初等英語教育と中等英語教育との縦の連携に加えて、言葉を媒介とした各教科同士の横の連携が行われたならば、新しい英語教育のあり方を示すことができるのではないだろうか、という期待である。

そしてその原点は、最初期の成城小学校におけるもっとも大きな研究成果の「児童語彙の研究」であり、その視点から出発する英語教育がもし提示できるならば、それは「児童語彙の研究」の発展的継承となるのではないだろうか。研究は、ある人たちによるある時期だけのものではなく、あらゆる方向へ拡張し、継承・発展するものである。成城学園は、そうした研究実験学校としての伝統を持っている、稀有な存在なのである。

野上が「セクショナリズムに侵されないで、良いことは一つやってみようじゃあ〔な〕いか、という気持ちで、成城学園に自他ともに誇れる「英語教育」を築きあげたい」⁽⁴⁸⁾と述べるように、筆者も心から期待する。

注

- (1) 『成城小学校』1929 (昭和4) 年、86 頁
- (2) 柴田勝「成城学園小学校の英語教育」(野上三枝子「成城学園初等学校における英語教育の歴史」(『成城学園教育研究所研究年報』第1集、1978 (昭和53) 年) より引用) 148 頁。柴田は、1930 (昭和5) 年に成城小学校に着任した。なお、当時小学校英語に対する保護者のニーズがどのくらいあったのかについては本稿の主題からは外れるが、興味深いテーマではある。
- (3) 同上
- (4) 柴田前掲 146～147 頁
- (5) 柴田前掲 148 頁
- (6) 木村については、松本のような異動情報はないためまったく不明である。なお、1934 (昭和9) 年10月段階では、小学校の英語の担当として「室岡、世良、江川」の各訓導の名があるが(「各学科担任表 (成城学園)」小宮資料 52-51) 松本の名はない。
- (7) 柴田前掲 147 頁
- (8) 『成城だより』第15号(1941 (昭和16) 年2月) には、彼の異動記事が掲載されている。
- (9) 『教育改造』に掲載されている深水の論文は、「視覚教育論」(第4号、1946 (昭和21) 年9月)、「教員組合のあり方」(第8号、1947 (昭和22) 年6月)、「労働教育のパンフレット」(第9号、1947 (昭和22) 年7月)、「アメリカ社会科教科書 近い所や遠い所で働いている大人の人達」(第10号、1947 (昭和22) 年9月)、「労働教育パンフレット (下)」(第10号、1947 (昭和22) 年9月)、「社会科教育と民俗学と」(第11号、1947 (昭和22) 年11月)、「児童文学の課題」(第14号、1948 (昭和23) 年6月)。
- (10) 『成城学園六十年』(1977 (昭和52) 年)、197 頁
- (11) 成城学園小学校英語研究部『小学生の英語教育』国土社、1969 (昭和34) 年、序
- (12) 野上前掲「成城学園初等学校における英語教育の歴史」148 頁
- (13) 野上三枝子「当校英語教育カリキュラムの変遷」成城学園初等学校英語教育部『成城学園初等学校における英語教育』5 頁
- (14) 千種は、浜松高等工業学校で教鞭をとっていた1929 (昭和4) 年に『学習活動と教育活動』(最新教育研究会) を発表しており、その後カリキュラム論の研究を進めていた。
- (15) 「曙光さす学園小学部」『学園時報』第47号(1933 (昭和8) 年8月20日)
- (16) 同上
- (17) 成城学園教育研究所所蔵。『成城の教育』は、創刊号以外は学園に残されておらず、その後どうなったのか不明である。
- (18) 「全学園評議員会議事録」1936 (昭和11) 年9月24日。小宮資料 55
- (19) 「学校から家庭へ」成城小学校『成城』第1号、1936 (昭和11) 年。奥付はなく、内容から1936 (昭和11) 年4月から5月ごろ発行と推測される。
- (20) 「教育の根本問題について」『成城』第1号、1～2 頁
- (21) 「第三号を刷るにあたって」『成城』第3号、1936 (昭和11) 年12月

- (22) いずれも成城学園教育研究所蔵。発行年月については、鉛筆手書きでのメモがあるものについてはそれに従った。第7号は教科別の特集はなく、第6号に引き続いて「児童読物紹介」の特集となっている。第8号は欠号。
- (23) 1940（昭和15）年には、国民学校案と成城教育との比較研究を検討する研究会が開催され、その成果は『成城国民教育研究 第一輯』として公開された。
- (24) 深水正策「英語科の学習（三・四・五年生のために）」『成城』第2号、1936（昭和11）年7月、14～15頁
- (25) 同上
- (26) 柴田前掲 148頁
- (27) 成城学園小学校英語教育部『小学生の英語教育』国土社、1969（昭和34）年、185頁
- (28) 深水前掲「英語科の学習」15頁
- (29) 柴田前掲 145頁
- (30) 「成城事件」後、成城教育の建て直しのため、「各科連絡会」が1934（昭和9）年度より開催されている。そこでは、小学校や高等学校、高等女学校で各教科別に具体的な連絡や要望について協議されており、英語についてもかなり詳しく話し合われている。したがって、まったく没交渉というわけではなかったようである。これらの詳細については、稿を改めて検討する。
- (31) 柴田前掲 145頁。なお、旧制成城高等学校では、尋常科を「中学部」と称していたようである。本稿においてもこの通称に準ずることとする。
- (32) 深瀬嘉三「中学部 英語教育について 家庭に於ける予習復習のために」『成城だより』第6号、1937（昭和12）年10月、5頁
- (33) 同上
- (34) 先に述べたとおり、1936（昭和11）年段階では、深瀬も小学校英語を担当しているが、実際の深瀬の役割は不明である。
- (35) 深水前掲「英語科の教育」14頁
- (36) 同上
- (37) 「旧職員座談会 成城小学校の誕生 — 成城小学校小史（一） —」『成城教育』第4号、1957（昭和32）年、61～62頁
- (38) 拙稿「研究する教師たち」『成城大学共通教育論集』（成城大学共通教育研究センター）第9号、2017（平成29）年、12頁
- (39) 鳴浜小学校『新入学児童語彙の調査』（1924（大正13）年）、岡山師範学校附属小学校『児童の語彙と教育』（1935（昭和10）年）、長野師範学校附属小学校『児童の語彙と国語指導』（1944（昭和19）年）などは、この研究の延長線上にあるものと言える。
- (40) 成城学園小学校英語教育部前掲『小学生の英語教育』185頁
- (41) 庄司和晃『柳田国男と教育』1978（昭和53）年、評論社、29頁
- (42) 柳田国男『分類児童語彙（上巻）』1949（昭和24）年「諸言」
- (43) 庄司前掲『柳田国男と教育』31頁

- (44) 成城学園小学校英語教育部前掲『小学生の英語教育』191頁
- (45) 野上三枝子「小学校児童と英語 — 児童の外来語の語彙調査 —」『成城教育』第22号、成城学園教育研究所、1974（昭和59）年、25～26頁
- (46) 野上前掲「小学校児童と英語」26～27頁
- (47) 野上三枝子「成城学園初等科における英語教育」『成城教育』第5号、1958（昭和33）年3月、27頁
- (48) 野上三枝子「『成城学園』の英語教育を」『成城教育』第15号、1974（昭和59）年3月、120頁